

②着床…母体との互縁で自己が成立する段階（一般的には着床で妊娠という）

③脳神経細胞の成立…認識主体の成立する段階。

④母体からの分離…人格としての自己の成立、という段階的な分け方ができよう。

その時、初期の段階の自己に対して、脳神経が成立したら脳神経の自己のほうが上位になり、人格が成立したら、人格としての脳が上位になるであろう。

すると、上位の自己（人格）から見たら下位の自己（身体）は、自己の対象であり、治療上分離しても自己の喪失にはならない。

③、結論として〔ヒトの命としての尊厳の確立点〕は「着床」からという考え方も可能である。

*ただし、この考え方には、人工妊娠中絶の是非において、母体の胎盤と胎児が相補的でこそ生命の自立といえるとすれば、母親が相補性を拒否するから胎児の生命保続を断ち切ることが緊急避難的に行われるという答えかたができる。

受精卵・胎児を自立した生命とする限り、人工妊娠中絶は否定され、それを希望した女性の痛みは「罪意識が増大される」ことになる。

II、宗教と生命倫理について

[日本における他の宗教の状況・考え方]

- 結論 1) 生命への畏敬が前面に出て、積極的な「慈悲」としての検討は少ない。
2) 禅宗などは、仏の命を主体的に生きることを重視するが、積極的ではない。
3) 議論の場合も医療現場とかみ合う具体性に乏しい。それは必要性が低いから。
4) 知らない新奇なものへの違和感が前提にある批判になっているのではないか。
5) 靈魂観念に依拠した宗教は反対の理由が明確である。

①、生命は、存在の本質に関わるので、宗教の核心とも重複する。そのため生命の神秘と奇跡は「神秘主義宗教（カルト宗教）」にとって重大な関心事になる。その結果彼等は神の偉大な力として利用する危険が高い。それを防ぐためには、科学者の研究を過剰に規制して宗教に流れることがないよう予防を講じる必要がある。（イスラエル・ムーブメントがクローン人間造りをしようとしている）

2、日本の神道系新宗教（具体的に氣は大本教）では、靈魂觀から、心臓が動いているうちは靈魂が宿るとして脳死に反対している。また「生長の家」では人工妊娠中絶反対のために、中絶の実体についても情報を集めて反対運動を展開している。

浄土真宗大谷派は脳死・臓器移植に反対している。弥陀に生かされている命に人間が介入することへの批判である。本願寺派もやや近いか。

3、他の佛教団体などは、研究段階の所や、無関心なところが多い。
「生き方を考える会」（医師と僧侶の有志の会）では脳死賛成の立場から、その一線について研究しホームページで公表した。

4、台湾佛教、タイ佛教、スリランカ佛教、韓国佛教は、脳死臓器移植などには、慈悲の